様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３４３１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０３０６６

研究課題名（和文）人形芝居における儀礼の復活と門付の伝統に関する研究－淡路人形芝居を中心として

研究課題名（英文）From Symbols of Stigma to Icons of Identity:A Study of Ritual Puppetry in the Revival of Awa(Tokushima) Ningyo Tradition.

研究代表者
姜　竣（Kang, Jun）

京都精華大学・マンガ学部・教授

研究者番号：６０３１６８６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、一度消滅した淡路人形伝統の再生にみられる様々なノスタルジアの輻輳に関するジェーンマリー・ローの研究に触発され、徳島県で被差別状況故に消滅しかかった人形芝居の門付が部落解放運動の一環として復活し伝承されている事例の調査を通して、現在の儀礼細則（新正月から旧正月への移行など）が被差別状況による変容の結果であること、そして、残存する人形や衣裳や記録などの資料形態と人形遣いの足跡にみられる活動形態（門付／大道芸／興行）から地理的意味が読み取れること（マレビトの地理学）、さらに、門付を受ける側は「三番叟」まわしを神事とし、夷昇きを物もらいとして区別あるいは差別していることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Awa puppetry, called Awa Deko-mawashi, had once disappeared due to social discrimination against itinerant puppeteers in western Tokushima. Today, however, Awa ritual puppetry appears to have made a comeback by the Awa Deko Hako-mawashi Hozonkai(Awa Puppetry Preservation Society) as a part of their struggle for equal rights. This study traces the history of comeback in this retrieval process in the last two decades. It reveals transformations of one specific type of ritual puppetry—kadozuke,“rites at the gate” under the influence of social discrimination. It draws the itinerancy geographically, through the loci in which puppeteers have brought to their footsteps light themselves by leaving puppets, costumes, and ritual implements on bases of their activities on the road. This study also discloses that a certain number of hosts have assumed an ambiguous attitude to puppeteers as outsiders associated with their otherness derived from playing ritual services and begging even today.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：門付　差別　芸能　ノスタルジア　伝承　儀礼　人形まわし　歓待

## １．研究開始当初の背景

⑴　ジェーンマリー・ローによると[2012]、戦後、「日本の過去を取り戻す」運動は郷土芸能の復興に焦点を当て、文化財保護行政、民俗学運動、さらにディスカバー・ジャパンのようなツーリズムによって実行された。漂泊芸能民が担う門付の儀礼芸能は、消滅の背後に被差別状況があり、だからご神体であり生きる術であった人形はスティグマのシンボルとして封印された。その復興の過程で行政、学問、社会は、担い手たちが伝統的に果たした儀礼上の役割の本質的要素、即ち体制外者の漂泊性と他者性が清祓体系の中で発揮した力を正当に評価できないため、復活を願う門付芸人たちの伝統への郷愁と、漂泊芸能民としての被差別経験の狭間に横たわるアンビバレンス、または、地域の誇りである事と社会的烙印である事の矛盾に光を当てられない。アンビバレンスを孕んだ人形遣いたちの「経験としてのノスタルジア」は、戦後の文化行政と民俗学運動がスキーム化し、ツーリズムが消費化した「日本人」というアイデンティティの原動力である「イデオロギーとしてのノスタルジア」の蔭に隠ぺいされてしまうのだ。

⑵　筆者は長年紙芝居の調査研究に従事したが[姜：2007]、かつて紙芝居屋は「乞食商売」と蔑まれたからと、過去の経験を語りたがらない人も多い。兄弟や子どもへの迷惑を恐れる心情は分からなくもないが、親の過去には触れられたくないと聞き書きを断られた時はやるせない気持ちが込み上げてきた。漂泊的遊芸民または遊動的芸能民に対する差別を超えるためには、ノスタルジアの言説の中心化を退けながら、近現代の統制や社会的諸力の介入が及ぶ以前の、他者性がより十全な門付儀礼伝統を洗い出しつつ、彼らが有する境界性の価値の深耕と伝統的な価値の再文脈化を図ることが不可欠である。

## ２．研究の目的

⑴　民俗芸能である人形芝居の再生に焦点をあてて、かつて行われていた儀礼と現在の儀礼を比較検証し、その歴史的変遷をたどりながら、それぞれの時代における人形芝居の担い手たちの置かれた社会状況（被差別状況）を考察し、芸能者の儀礼への関わり方を民族誌学的に明らかにする。本研究では、淡路人形芝居、阿波木偶廻しを取り上げ、一度消滅した儀礼が現代に復活した背景を明らかにするとともに、門付の伝統に対する担い手たちの社会的役割と社会的位置づけならびに担い手たちに対する社会的期待感を、文献や形態資料の調査ならびにエスノグラフィーの手法を用いて実証的に検証する。人形芝居の歴史的空白を記述するとともに、現代における地域文化・伝統文化の有する意味を探究し、生活文化史の再構成を試みる。

⑵　本研究の目的は、〈旧来の儀礼と現在の儀礼の比較検証〉〈各時代における芸能者の置かれた社会状況〉〈芸能者の儀礼への関わり方〉〈人形芝居における歴史的空白の記述〉という研究成果を導き出すことである。

## ３．研究の方法

⑴　淡路人形芝居の実践形態の調査並びに阿波木偶箱廻しの実態調査を実施する。すでに消滅した淡路人形伝統における門付の社会的意義を明確化するには、近時、門付を継承し、人形儀礼を人権啓発に活用している阿波木偶箱廻し保存会の活動に着目し、両者を比較検証することが必須である。それは儀礼芸能の現代的な役割を明らかにする上での明確な指標となる。

⑵　漂泊的遊芸民または遊動的芸能民における社会的周縁性に関する歴史研究（部落史、芸能史、身分的周縁論）を通して、その漂泊性の変容を明らかにする。

⑶　現在行われている人形芝居による門付の民族誌学的調査研究を通して門付を受け入れる側の心性（歓待／排除）に迫る。とり

わけ、徳島県において門付の復活がいっそう活発であることから、研究代表者は主に徳島県を中心とした四国地方で調査研究を行う。

４．研究成果

⑴　阿波木偶の伝統の形成と消滅と再生の過程並びに門付の漂泊的価値の再創出について

姜は「阿波木偶の伝統と被差別民の漂泊性」（2018）という論考において、門付の人形芝居の再生に焦点を当て、一度消滅しかかった儀礼が現代に復活した過程とその背景を明らかにしつつ、門付の伝統に対する現今の担い手たちの意識や彼らに対する社会的期待感を、民族誌の手法を用い、地域史の成果を活かして実証的に検証した。ジェーンマリー・ローによると、伝統的に人形芝居が果たした儀礼上の役割は、本質的には人形遣いの体制外者（アウトサイダー）としての漂泊性や他者性に負うところが大きかったが、彼らはまさに門付の伝統ゆえに自らの過去に対して「痛み」や「辛さ」を抱いてきた。そして、ご神体であり生きる術であった人形は、スティグマのシンボルとして封印された。ローの研究に触発された本研究は、自らの過去を隠ぺいし否定させる社会状況と、埋もれた歴史と価値の再発見の狭間で、門付の人形芝居の復活はいったいどのような漂泊性を発揮するのかを論じた。

歴史的に人形芝居が盛んな徳島県西部の各地、とりわけ東みよし町で、主として門付の実地調査、人形芝居の歴史や地域史に関する文献調査、市町村史（誌）並びに文化財行政関係者への関する聞き書きを行うと同時に、近世以来当地に伝承されてきた三番叟廻しとエビス廻しを継承し、門付を復活させた阿波木偶箱廻し保存会（徳島市内）に対する現地調査を実施した。徳島県の地域史や四国部落史の理解は、阿波木偶の実践形態と従事者たちの社会的かつ歴史的な動態を把握し、本研究に動機を与えてくれた淡路島の人形伝統と阿波木偶のそれを比較する上で不可欠な前提的作業である。保存会に対しては、差別の対象でもあった人形廻しを復興させた事情や文脈について調査することで、本研究の核心である、漂泊の門付を現代に蘇らせることへの誇りと、被差別経験による「痛み」とのかかわりを理解しようとした。

さらに、復活した門付における漂泊的価値の再創出を捉えた。佐治ゆかりはその黒森歌舞伎の研究[2013]において、文字資料で黒森歌舞伎を研究することの限界、即ち文政～天保期の「諸国芝居繁栄数望」に依存し、地芝居における宗教性と運営の仕組みやその特徴に配慮しない従来の研究を克服するために、近世期の鶴岡や酒田における都市部の「興行」に関する歴史学的方法と、郷村部で「法楽」として行われる黒森歌舞伎に関する民俗学的方法、並びに衣装や鬘といった形態資料に対する博物学的方法とを峻別しつつ統合を図ることで、近世を「芸能の商品化」[守屋:1985]の時代として捉え過ぎることを避け、様々な芸能集団の個性や地域性、営利性に対する宗教性を見損なう可能性を開陳し、本研究は多くの示唆を得た。本研究では、香川県において阿波の人形芝居が地芝居化した事例や、阿波木偶箱廻し保存会によって現代に復活を遂げた門付の現地調査を通じて、門付における儀礼なり芸能が制度や市場に専ら依存することなく、漂泊的価値を生み出す関係を作り直している様子を捉えた。

⑵　語られないものの調査における調査者の位置について

世間話研究会（2018 年 5 月 12 日、國學院大學）において「ノスタルジア、被差別経験、憑依の語りの現代的文脈」と題する例会を企画し、①「東京都墨田区立川一丁目町会、八年目につき」（後田泰輔）、②「夷舁きの消滅と三番叟廻しの復活」（姜竣）、「オシラ神と祭祀者の身体－「授かる」「うつらはる」を

めぐって－」（山田巖子）という発表を行い、それぞれ、町内会のつきあいという日常に深く埋め込まれた関係において語りだされる地域の過去、被差別経験ゆえに消滅した人形廻しによる門付けの再生、女性の祀り手に憑依し心身と呼応するオシラ神をめぐる象徴的語りを取り上げた。

町の過去の記憶がほとんど偶発的に蘇る場面に出くわし得るのは、調査者（生活者）としての位置が前提である（①）。被差別の当事者にしか（さえ）到達できず、調査拒否に阻まれたとき、①とは逆の意味で自分自身の調査者[三浦：2017]としての位置を強烈にとわれる経験をした（②）。①と②と並んで、調査者としての位置、さらには調査の結果よりプロセスを重視してみた場合、③はオシラ神を授かる経験の語りを、いわゆる民俗調査の「お題目」に堕することなく個々の祀り手の心身と呼応する次元で聞き取ることができる。それらを通じて、方法の限界、認識のズレや盲点、被差別状況ゆえに語りだされなかったものや、聞き損ねてしまったことの価値、すなわち、日本における民族誌学的な調査にもたらす前衛性について考えた。

⑶　ネオリベ状況の下での新たなローカリティの模索

単なる移行点でしかない、均質で空虚な時間をたどり続ける歴史の連続を打ち砕いて、抑圧された過去のいまここに唯一無二の存在としてあるものを救済＝解放すること[ベンヤミン:1995]。ネオリベラリズムが席巻する世界資本主義の下で、パッケージ化により勝利する道を進まない、敗北したローカリティの生き延び方を追究すること[関根康正：2009]。イデオロギーとしてのノスタルジアの蔭に隠ぺいされてしまった経験としてのノスタルジアを救い上げること[ロー：2012]。これらを指針として、あらゆるものがナショナルな次元を疾うに超えた諸力に浸食され、断片化し流動化しつつあるネオリベ状況下で、向き合うべきローカリティとはいかなるものあるかを、われわれの認識と方法から抜け落ち、やり過ごされ、語りえなかったものたちの生き延び方の前衛性に着目しながら追究するために、本研究の代表者と分担者は「ローカルなものの生き延び方–現代における人形儀礼の再文脈化」というシンポジウムを開催し（日本口承文芸学会第 42 大会、2018 年 6 月 3 日）、研究成果を活かした。

研究分担者の森田良成は映像人類学の手法により、徳島県三東みよし町における門付の現在を、受け入れる側の視線から捉える映像作品を制作した。分担者の山田巖子は、東北におけるオシラ神信仰の儀礼と阿波木偶廻しのそれとを比較する視角から、青森県津軽地方において真言宗の寺院が統括する新しい信仰形態と、祭祀の場での憑依現象を軸とする福島県会津地方のオシラ神信仰とを対比させながら、藩政期に起源を持つと考えられる民俗信仰の近代以降の「生き延び方」を考察した。代表者の姜は、1970 年代初めに人形の部落の若者を巻き込んだ結婚差別による心中事件が原因で、殆どが廃業に追い込まれてしまった阿波の木偶廻しが、約 20 年前に徳島市内の被差別部落で部落解放や同和教育の運動に取り組む人たちが復活させ、今日に至った過程を取り上げつつ、戦後、淡路島の人形伝統が再び活性化する過程で、ローが「ノスタルジア」を手掛かりに探りあてた人形遣いたちのアンビバレンス（被差別経験の「痛み」／人形遣いのアイデンティティ）とは対照的に、徳島県の事例は、スティグマのシンボルとして封印された人形を、同和教育や人権啓発活動のイコンへ持ち替えたところに特徴があることに着目し、自らの過去を隠ぺいし否定させる社会状況と、埋もれた歴史と価値の再発見の狭間で、門付の人形芝居の復活が新たなローカリティを出現させる様態を捉えた。そこで、現在の儀礼細

則（新正月から旧正月への門付の移行など）が被差別状況による変容の結果であること、残存する人形や衣裳や道具などの資料形態と人形遣いの足跡にみられる活動形態から地理的な意味が読み取れること、門付を受ける側は「三番叟」廻しを神事とし、夷舁きを物もらいとして区別あるいは差別していることを明らかにした。

＜引用文献＞

①ヴァルター・ベンヤミン 1995「歴史の概念について」[歴史哲学テーゼ]『ベンヤミン・コレクション①近代の意味』久保哲司ほか訳、筑摩書房
②姜　竣「阿波木偶の伝統と被差別民の漂泊性」関根康正編『ストリート人類学―方法と理論の実践的展開』風響社、2018
③姜　竣『紙芝居と〈不気味なもの〉たちの近代』青弓社、2007
④佐治ゆかり『近世庄内における芸能興行の研究―鶴岡・酒田・黒森』せりか書房、2013
⑤ジェーンマリー・ロー　2012『神舞い人形―淡路人形伝統の生と死、そして再生』齋藤智之訳、私家版（Jane Marie Law, Puppets of Nostalgia: The Life, Death, and Rebirth of the Japanese Awaji Ningyo Tradition. Princeton: Princeton University Press, 1997.）
⑥関根康正　2009「パッケージ化と脱パッケージ化との間での生きる場の創造、あるいは「組み換えのローカリティ―「資本としての知識」から「資源としての知識」への視点の移行がもたらすもの」関根康正編『ストリートの人類学　下巻』国立民族学博物館
⑦三浦耕吉郎『エッジを歩く―手紙による差別論』晃洋書房、2017
⑧守屋　毅『近世芸能興行史の研究』弘文堂、1985
⑧山田厳子「津軽におけるオシラサマ信仰の展開」ハンナ・サワダ・ジョイ、北原かな子編『日本語と英語で読む津軽学入門』2008、弘前大学出版会

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

①姜竣、スティグマのシンボルからアイデンティティのイコンへ―阿波木偶廻しの再生過程―（執筆中）、口承文芸研究、査読有、第 42 号、2019
②森田良成、門付けの継承にみる人形儀礼の再文脈化―阿波木偶まわしの事例―（執筆中）、口承文芸研究、査読有、第 42 号、2019
③山田厳子、祭祀者の身体と人形儀礼―東北におけるオシラ神をめぐって―（執筆中）、口承文芸研究、査読有、第 42 号、2019

〔学会発表〕（計５件）

①姜竣、近世日本における被差別身分と芸能興行の研究―四国地方の人形まわしを中心に―、韓国日本学会（国際学会）、2017
②姜竣、ノスタルジアの遠近法―淡路・阿波人形伝統の復活をめぐる、佐藤健二・高木史人先生還暦記念日本民俗学講習会、2017
③姜竣、スティグマのシンボルからアイデンティティのイコンへ―阿波木偶回しの再生過程―、シンポジウム「ローカルなものの生き延び方―現代における人形儀礼の再文脈化―」、日本口承文芸学会第 42 回大会、2018
④森田良成、門付けの継承にみる人形儀礼の再文脈化―阿波木偶まわしの事例―、シンポジウム「ローカルなものの生き延び方―現代における人形儀礼の再文脈化―」、日本口承文芸学会第 42 回大会、2018
⑤山田厳子、祭祀者の身体と人形儀礼―東北におけるオシラ神をめぐって―、、シンポジウム「ローカルなものの生き延び方―現代における人形儀礼の再文脈化―」、日本口承文芸学会第 42 回大会、2018

〔図書〕（計１件）

姜竣「阿波木偶の伝統と被差別民の漂泊性」関根康正編『ストリート人類学―方法と理論

の実践的展開』風響社、2018、pp.207-234、

〔その他〕
森田良成、映像作品『「三番叟」を迎える』(20分)
https://drive.google.com/open?id=1hCe-mlhyn2bKjL5PcH-JUqPzdpyYmLED

## ６．研究組織

⑴研究代表者

姜 竣（KANG, Jun）

京都精華大学・マンガ学部・教授

研究者番号：60316867

⑵研究分担者

山田　嚴子（YAMADA, Itsuko）

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：２０３４４５８３

⑶研究分担者

菊地　暁（KIKUTSI, Akira）

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：８０３１４２７７

⑷研究分担者

森田　良成（MORITA, Yoshinari）

大阪大学・人間科学研究科・ 特任研究員

研究者番号：３０６４７３１８